

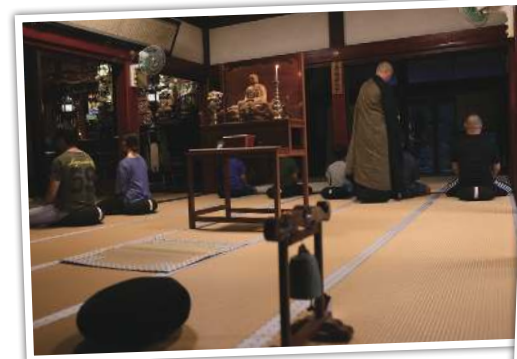
ハスワーク

お彼岸の頃に龍源寺では婦人会「きやらの会」主催で写経を行なつてまいりましたが、今回の秋彼岸はいつもと趣向を変えてハスを作る「ハスワーク」が開催されました。大勢の参加者がそれぞれに思い思いのハスを作成していました。

蓮の花は仏教を象徴する花です。泥の中から美しい花を咲かせる蓮は、泥を悲しみや苦しみに例え、その悲しみや苦しみをもつて花を咲かせるというように解します。今後も機会がありましたらこのハスワークを開催していくかもしれません。参加した皆様、お疲れ様でした。



坐禅



津南町剣道スポーツ少年団

船山子供会

龍源寺報

89号

大般若祈祷会並びに 伽藍屋根落慶式厳修

令和六年六月九日、昨年は屋根工事のためにお休みした大般若祈祷会と龍源寺伽藍屋根の落慶式が厳修されました。大般若祈祷会では参加者皆様それぞれの願いの成就を祈り、落慶式においては屋根普請篤志寄付の方々の表彰、そして三重県四天王寺住職・倉島隆行老師の講演会、曹洞宗三重県青年会和太鼓集団「鼓司」の和太鼓演奏と勤まりました。

龍源寺檀信徒にとっては伽藍の護持でも大切な屋根の普請でございましたので、意義の深い行持となったのではないかと思います。皆様の御協力のもとこれにて一つの区切りとなりました。引き続き伽藍並びに境内の護持にご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



境内での演奏



寄付単



鼓司の演奏

編集発行
曹洞宗 龍源寺
深見山
〒949-8311
新潟県中魚沼郡津南町
中深見乙1118番地
☎(025)765-3055



【公式HP】 <http://www.shinkenzan.com>



【公式Instagram】 @shinkenzan1582

両祖忌・達磨忌厳修

現在、龍源寺副住職が会長を務めている曹洞宗新潟県第一宗務所第八教区青年僧侶の会によって、龍源寺において九月二十九日に両祖忌、十月五日に達磨忌が厳修されました。

両祖とは曹洞宗大本山永平寺御開山・道元禪師と曹洞宗大本山總持寺御開山・瑩山禪師のことをさします。現代の太陽暦で換算するとお二人の命日がこの九月二十九日に当たるといふことで同日に両禪師様の御供養が勤まります。特に今年には瑩山禪師七百回大遠忌の年でございましたので、より意義深い法要となりました。

達磨大師はあの「だるまさん」に当たるお祖師様ですが、インドより中国に仏教を招来した禪宗の初祖として曹洞宗や臨済宗で重んじられるお方です。我々では「震旦初祖圓覚大師・菩提達磨大和尚」とお呼びします。

先回のお釈迦様の涅槃会・降誕会同様、御本山等で行われる法要通りの本式の形で青年会のメンバーと龍源寺住職、田上町定福寺御住職（龍源寺住職三男）と厳かに勤めることができました。



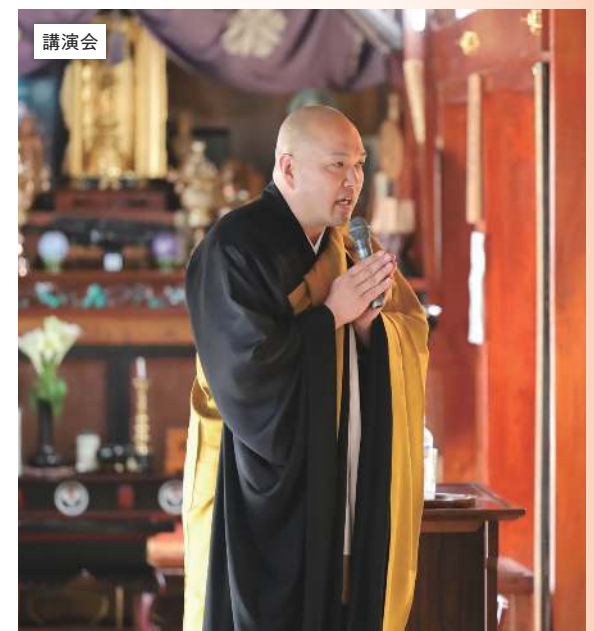
大般若祈祷



落慶式



沙弥たちも随喜



講演会



龍源寺梅花講員物故者供養



本尊上供法要



師範会千万の皆様



宗務所長より祝辞



大勢の梅花講員



講演会



高田華聖先生

龍源寺梅花講五十周年記念式典挙行

令和六年十月十四日、龍源寺において龍源寺梅花講五十周年記念式典が挙行されました。発足当時に大変なご協力をいただいた十日町市智泉寺梅花講はじめ、龍昌寺梅花講、観泉院梅花講など多くの梅花講員にも参集いただきました。そして新潟県第一宗務所長、宗務所師範会千万など総勢百十名を超える中での法要式典となりました。

式典引き続き、講演会がつもりでしたが、奈良薬師寺元管主で法相宗管長も勤められた故高田好胤師の御息女、エッセイストの高田華聖師に講師をお願い致しました。柔らかなお人柄で、仏教のお話しを優しく講演くださいました。引き続き祝齋が開催され各講の出し物もありお開きとなりました。次の五十年も続いていくように精進してまいりたいと思います。龍源寺梅花講、常に講員を募集していますので今後ともよろしくお願い申し上げます。

『冊子』越後妻有ふるさとのお寺』出版



ついで、妻有百三十三番霊場についてなど、妻有地域と我々曹洞宗の関わりについてまとめた冊子となっております。

人口減少が言われる中、伝わってきた伝承などが後世に残していけない可能性の高い状態です。でありますので、現時点で分かることを記録として残す意味合いも込めた冊子となっております。

現在、龍源寺副住職が会長を務めている曹洞宗新潟県第一宗務所第八教区青年僧侶の会によって、私が任期中の特別事業として二年半以上の歳月をかけて「越後妻有ふるさとのお寺」という冊子を出版致しました。

お寺は人がいなければ開創されません。龍源寺で四四〇年以上、妻有地域で最も古い曹洞宗寺院旧川西町の長福寺さまは六百年を超える歴史を刻んでおります。興味のある方には手に取っていただき、歴史の重みとこれからへの責任を感じていただけたらと考えてます。

妻有地域内にある三十一の曹洞宗寺院の紹介を中心に、妻有と縁のある名僧（大訥愚禪老師・滝谷琢宗禪師・星見天海老師）の紹介、妻有と良寛さま（十日町市祇園寺様所蔵・良寛詩に

龍源寺含め妻有地域内曹洞宗寺院で取り扱いの他、各自治体図書館やセレモニーホールなどで閲覧することが可能となっております。

『塔婆（卒塔婆）について』

皆様にも馴染み深い、供養につきものの「塔婆」とは如何なるものなのでしょうか。ここに説明を試みたいと思います。

塔婆は正確には「卒塔婆」と言います。サンスクリット語（古代インドの標準的文章語。俗語乃至方言をパーリ語という）のストウーパの音写と言われ、インドでお骨や遺品を納めた煉瓦作りの塔のことを言います。中国では石造、日本では木造（五重塔など）で建立と仏教化圏でも材料は様々ですが、供養のために塔を建てるといふ仏教文化が転じて現在の供養の際に卒塔婆を建てるといふことにつながっています。

葬儀の際に建立する七本塔婆、翌日棚送りの際に建立する卒哭忌（百日忌）の塔婆、そして一周忌以降の年忌の塔婆とありますが、供養の中でも特に重視される三十三回忌の塔婆については六尺の塔婆を龍源寺では用いています。まさに仏塔といえるようなサイズ感です。



（三十三回忌の説明については寺報のバックナンバーにて確認できます。龍源寺ホームページにも公開中です）
また、塔婆の処分時期を聞かれることがままありますが、住職は「見苦しくなったら」というふうに説明しておりますし、私が四九日納骨の際にお墓にて説明する場合は「一周忌の塔婆を建立するまでは百日忌の塔婆は建立していただく」というふうにお話しさせていただきます。いずれにしても雪が降る前には卒塔婆を寝させて折れないようにするなど大切に扱っていただき、すぐに処分をするようなことがないようにしていただきたくないと考えます。

寺職の随筆

第8回

宗教と共同体

紙面を割けない都合上、久しぶりに筆を持ったこの随筆コーナーですが、法話というわけでもなく徒然なるままに私が感じたことや思ったことで皆様にも興味のあるような事を書いていこうと思います。

「宗教」という言葉については、明治以前の日本にはなかった概念で、キリスト教の流入などで使われるようになった言葉とされています。仏教の用語としては「宗派の教え」という意味で宗教という言葉がありませんが、英語の Religion に相当する言葉が日本語にはなく、「宗教」という言葉を当てたと昔何かで読んだ記憶があります。キリスト教においては神と人間の再結合という意味があるようですが、この再び結びつく、ということがポイントの言葉のように思います。

田舎にいとよく感じるのですが、日本人にとつての「宗教」とは「習慣」と「共同体」と「文化」というものを抜きには考えられないのではないかと思います。例えば食事の時の手を合わせて「いただきます」「ご

ちそうさま」はいい例でしょう。習慣であり文化ですが、これほど宗教的な行為はないように見えると思います。宗教的であるからという理由で、笛の合図で食事をはじめたという学校か何かがあるという記事を昔何かで見かけましたが、もうここまで来たら犬と変わらないうままできているなと感じました。イエスに菩提寺があるというのも（例えば桑原の一族はみんな龍源寺の檀家であるなど）、ムラごとに神社があるというのも、個人ではなく共同体レベルでお寺や神社が存在し護られ、様々な習慣や文化が共同体と一体となってきたのが日本人の姿であるのではないかと考えます。そのような意味では身近すぎで意識されないのが日本人にとつての宗教ともいえます。

SNSの隆盛やコロナ禍を経て、益々「個人」が強くなった世の中ですが、この共同体を捉え直す時期にきていると私は感じます。人は独りでは生きられません、孤独になつていく人がどんどん増えています。「個人」は「共同体」がなければ成り

立たないのではないのでしょうか。家族や家庭も「共同体」の一種です。菩提寺と檀信徒の関係性もこの「共同体」になると思います。が、ある新しい檀信徒が「仲間に入つていたい」という言葉を使われたとき、この仲間入りしているという状態がお寺と檀信徒の関係性でもあるのだなと感じたことがあります。また別の檀信徒がお寺に非協力的な檀信徒のことを「仲間に入れていてもらいたくないからなんとかしたい」と言っていたことも印象的でした。起業する人も他者と「共同体」を作つて起業することが多いと思いますが、何をすることもこの他者との関係性において「個人」は成り立っています。



日本人であるならば、誰でも知っている大丈夫という言葉ですが、仏教に関わりのある言葉というのは案外知られていません。元来は「大」がつかず、「丈夫」という語ですが、精進して退かない修行者などの意味があります。如来十号という仏様の十種の徳号の一つとしては「調御丈夫」という「人を導くのに巧みなる人」という意味もあります。

「大丈夫」となる場合は、特に私たち禅宗においては大乘仏教の根器を備える士、という意味もありますが、いずれにしても現行の大丈夫という言葉の使い方とはやや一線を画している感があります。仏教では「丈夫」という語自体が尊称の意味合いがあるのです。漢語としては一人前のしつかりした男性という意味合いですが、現在のよ様な危なげのない様子を表す用法になぜなつたのかは興味深いところです。丈夫のようであれ、という励ましのようなこともあつて今の意味になつていられるのかもしれないですね。



大丈夫